

～熊本地震から5年、その先へ～ 大学生が考える「記憶の継承」

水の国くまもと 未来予想図プログラム



サントリーは熊本県内に生産拠点を置く地元企業として、「ずっと、あなたと、熊本と。」を合言葉に、熊本地震復興支援活動に取り組んでいます。地震から5年がたった今年、熊本日日新聞社と共に「水の国くまもと未来予想図プログラム」を実施しました。



コワーキングスペース「びぶれすイノベーションスタジオ」(熊本市中央区)で提案内容を練るメンバー。左から順にA、B、C班

参加学生
A班/左から大塚里美さん(熊本大学)、山田芽さん(同大大学院)、小川連太郎さん(熊本大学)、王光耀さん(同大大学院)
B班/左から高良幸作さん(熊本大大学院)、岩下佳澄さん(崇城大学)、村田和泉さん(熊本大学)
C班/左から竹原大旗さん(熊本大大学院)、坂元彩華さん(熊本大学)、西尾ひよりさん(同大)

「水の国くまもと 未来予想図プログラム」は熊本地震からの5年を振り返り、災害の記憶の継承と防災の知恵の伝承といった課題を抱える地域に対し、若者が自ら考え行動する「考動(こうどう)」により、未来に向けた提案に取り組み、地域共創を目指します。地元の大学生や大学院生10人が参加し、5月29日から6月13日までの期間でワークショップ、住民・役場職員との交流、調査などを通じて自分たちの提案をまとめました。その後、各町の役場や県庁でプレゼンテーションしました。

プログラムの講師による総評

事前講義 5月29日・30日開催



京都大学防災研究所教授
矢守 克也さん

当事者の「成解」大事に
ステップアップに期待

3班の発表の中には、記憶の継承に効果的なツールが出てきました。A班はボスター、B班は「笑本」を使ったストーリー、C班はアーカイブ(長期保存)。記憶の継承には「正解」を伝えるのではなく、当事者が悩みに直面しひねり出した「成解(せいげい)」を語り合ひ、何度も語り直すことが大事です。プログラムが終了したからこれで



SARCK(さるく)代表
松岡 優子さん

終わりでではなく、皆さんが今後、さらにステップアップしていけることを期待しています。
創造力と想像力を確信
「何かが始まった」実感

ゼロをイチにすることが一番大変なことです。皆さんの創造力、そして想像する力を見せていただきました。発表をしている皆さんの先に人が見えるよう、きちんと



熊本大学熊本創生推進機構
准教授
田中 尚人さん

とまちで人に向き合っていく。まただと思えました。すてきな発表でした。今回のプロジェクトを通して、皆さんの中で何かが始まったのではないのでしょうか。今後に期待しています。
語り継ぐ意味を知り
貴重な成長の機会に

初日の講演で大切なことを学びました。矢守先生からは、語り継ぐことは災害や記

地域の課題解決を目指し「考動」



御船町の「お茶乃のぐち」野口大樹専務(左から2人目)を取材したC班の3人

プログラム初日、総合監修の熊本大学熊本創生推進機構の田中尚人准教授らが、熊本地震からの復興とは何かを考え、地域の日常を学ぶ機会にすべく、「記憶の継承」を中核とする3つのミッションを掲げ、本プログラムはスタート。ゲストによる講演で、御船町で緑茶の生産・製造・販売をしている「お茶乃のぐち」の野口大樹専務は「震災を経験し私は地域とともに生きる覚悟が決まりました」と被災者の決意を語りました。仲間と一般社団法人を立ち上げ、「われわれに何ができるか、行動で示してい



6/13の発表会で住民の顔と言葉を掲載したポスターをツールとする提案したA班(ポスター:左下写真)

きたいこの野口さんの言葉に学生たちは真剣なまなざしで聞き入っていました。活動期間中、学生らは3班に分かれ益城町、嘉島町、御船町の課題をそれぞれ考え、情報収集活動に取り組みました。
課題解決へ 提案を練る



みんなが「かたるましまち」
地産地消に



嘉島町役場で取材をするB班の3人(左側)

B班は嘉島町役場や地域の住民宅を訪問。まち歩きの中で、嘉島町は水害が多い一方豊かな水に恵まれた地域であることを実感。サントリー九州熊本工場から震災時の対応などを聞き取り、提案内容を検討しました。
C班は御船町市街地を訪れ、役場をはじめ飲食店や公園などで町民と交流。中山間地でも聞き取りを重ね、住民の意識の違いを感じ、みんなが震災の記憶を語り合える方法を検討しました。
6月13日、熊本日本社で各班は「考動」の成果を発表しました。A班の提案は「みんなな

が かたる ましまち。」「かたる」とは熊本弁で「仲間になる」の意味もある「語る」。小中学生が被災者から直接話を聞き、被災者の言葉を本人の顔写真入りのボスターに提示することで、震災の記憶と防災の知恵などが共有され、次世代への継承につながることを考えた。B班の提案は「笑本(えほん)からつくろ未来の嘉島」。C班の提案は「かたらんね

のや被災の記憶につながる絵や写真を貼り、文をつづるといふもので、自分が主人公となる物語を作ることが地域の課題解決につながることを考えた。
C班の提案は「かたらんね

「考動」の成果を3町へ 県庁訪問 副知事に報告



益城町長
西村 博則氏

各班は3町で「考動」の成果を提案。「住民参加型のまちづくりを目指しており、提案はそのプロセスを重視した内容(益城町)」「堅くなり組めそうな提案(嘉島町)」「行政では発想できない若者らしいアイデア(御船町)」と、それぞれ講評をいただきました。
そして7月16日、学生らは県庁を訪ね、これまでの活動を木村敬副知事に報告。副知事は各班の提案を聞き、「3班ともに、災害を他人事ではなく「自分事」として捉える姿勢を身に着けられたことに感銘を受けました」と総評しました。



熊本県 副知事 木村 敬氏



県庁で木村副知事(前列中央)を囲んだ記念撮影(撮影時のみマスクを外しています)



益城町役場で提案内容を説明するA班の4人

サントリー九州 熊本工場から

「考動」を未来への一歩に
今回の「水の国くまもと未来予想図プログラム」では、熊本の未来に向けた提案を拝聴し、熊本のワカモノのパワーに改めて感服しました。学生の皆さまの「考動」が熊本の未来への一歩につながると思っており、さらにはご自身のその先のヒントとなる経験になればうれしいです。コロナが収束した折にはぜひ工場にお越しいただき、私たちのものづくりへのこだわりと地域のつながりを体感いただけますと幸いです。



サントリーホール株式会社
サントリー九州熊本工場長
大下 勝巳氏

■ 本プログラムの特別番組が熊本朝日放送で放送されます。
放送日: 8月1日(日) 16時~16時30分
「記憶の継承、未来へ ~熊本地震から5年、若者と、地域と。~」

